

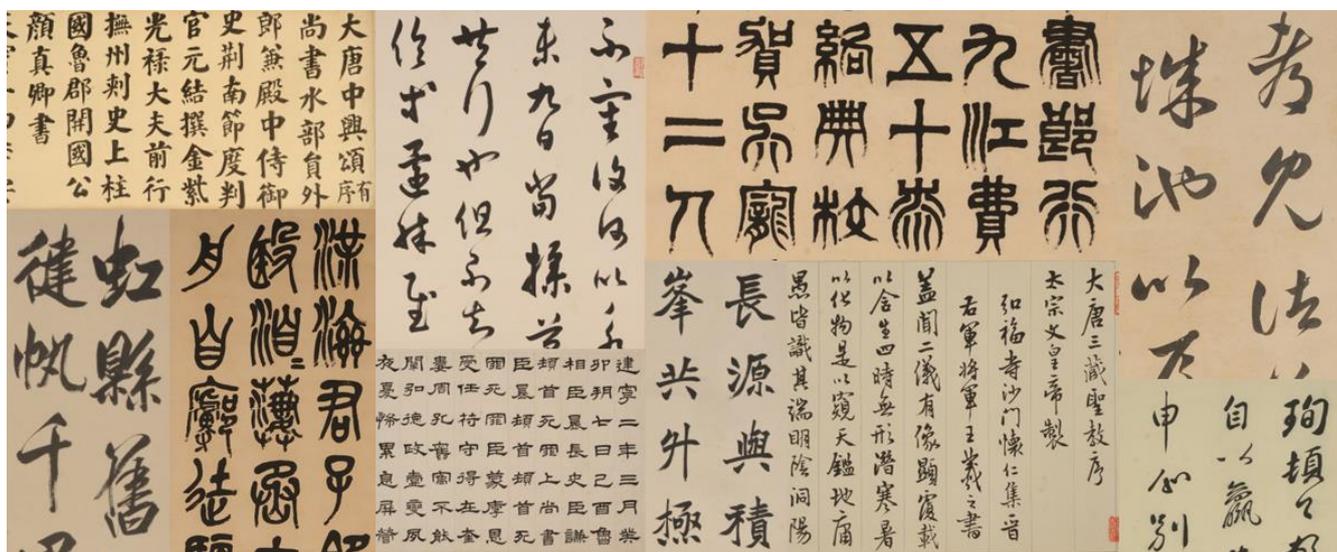
令和5年(2023)3月13日現在

観峰館 令和5年度 春季企画展

みて、うつす。

—中国近代の臨書作品—

開催のお知らせ



観峰館が収蔵する中国の書作品より、清時代後期から<sup>りんしよ</sup>中華民国初期頃に制作された臨書作品を特集します。臨書とは手本を「みて、うつす」ことです。書家たちが臨書するとき、それは手本の「再現」のみならず、独自の「表現」となることもあります。本展では、中国近代という激動の時代に<sup>のぞ</sup>生き、書に臨み続けた書家たちによる様々な臨書作品をお楽しみいただきたいと思います。

日 時：令和5年(2023)4月15日(土)～6月11日(日)

9時30分～17時00分

(入館は16時00分まで)

休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)

主 催：公益財団法人 日本習字教育財団 観峰館

入館料：一般500円 高校生・学生300円 中学生以下無料

作品総数：40点

(うち初公開10点)

※会期中の展示替えは

ありません。

〈本展の見どころ〉

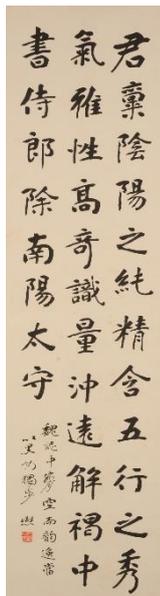
・<sup>かしょうき</sup>何紹基(1799～1873)や<sup>ごしやうせき</sup>呉昌碩(1844～1927)など、清時代後期から中華民国初期の中国書法史を代表する著名な書家の作品を展示します。



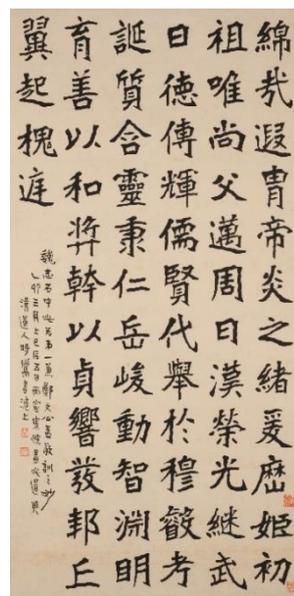
## I. 楷書一石に刻された正式書体一

楷書は、一点一画を切り離して正確に書く書体です。その萌芽は3世紀頃の中国に見ることが出来ますが、唐時代(618~907)に至って洗練された美しさを作り上げたと言えます。

本章では、まず唐時代の楷書を手本として臨書した作品を展示し、現代にも通じる楷書の典型をご覧ください。さらに北魏時代(386~534)の墓誌銘などを手本として臨書した作品もあわせて展示します。さまざまな楷書の臨書作品をお楽しみください。



曾熙 (1861~1930)  
《楷書臨張黑女墓誌軸》  
清時代末期~中華民国初期頃



李瑞清 (1867~1920)  
《楷書臨崔敬邕墓誌銘軸》  
中華民国4年(1915)

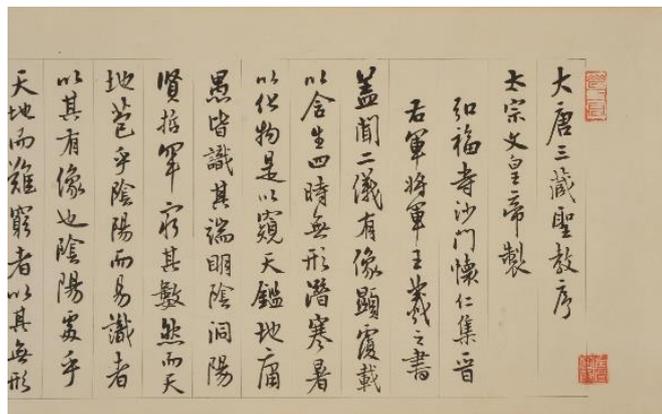


伊立勳 (1856~1942?)  
《楷書臨九成宮醴泉銘軸》  
中華民国7年(1918)

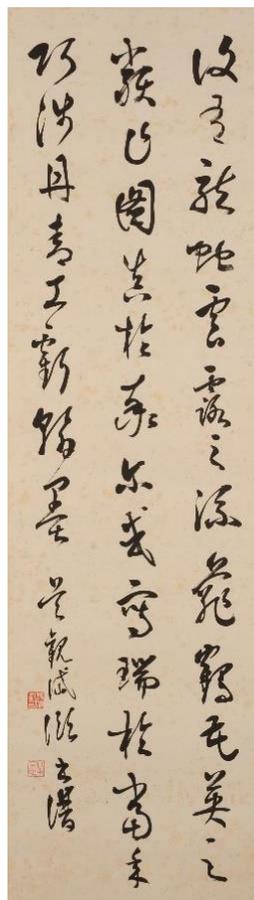
## II. 行書と草書一書聖・王羲之とその流れ一

行書と草書は、文字を速く書くために生まれた書体です。行書では点画を連続/省略し、草書では字形を簡略化して書きます。いずれも、漢時代(前206~220)の隸書を速写するなかで生まれてきたと言われます。

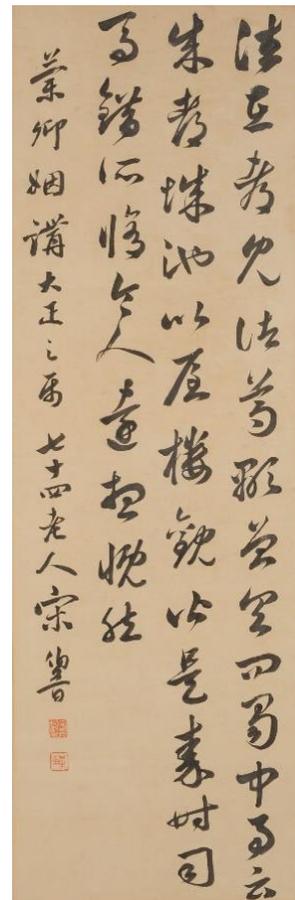
行/草書の手本として用いられる代表的なものは、東晋時代(317~420)の王羲之(303?~361?)によって書かれた作品群です。本章では、王羲之の代表作《蘭亭序》や、唐時代に王羲之の字を集めて作られた石碑《集王聖教序》などをはじめ、王羲之の流れを汲む行書と草書の臨書作品をご紹介します。



鄧散木 (1898~1963)  
《行書臨集王聖教序橫披》部分  
中華民国29年(1940)



吳觀岱 (1862~1929)  
《草書臨孫過庭書譜軸》  
清時代末期~中華民国初期頃

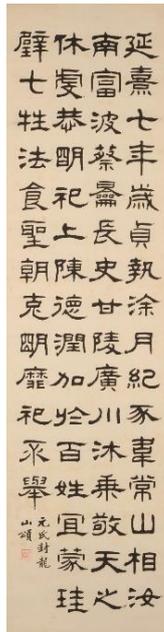


宋伯魯 (1854~1932)  
《草書臨王羲之成都城池帖軸》  
中華民国16年(1927)

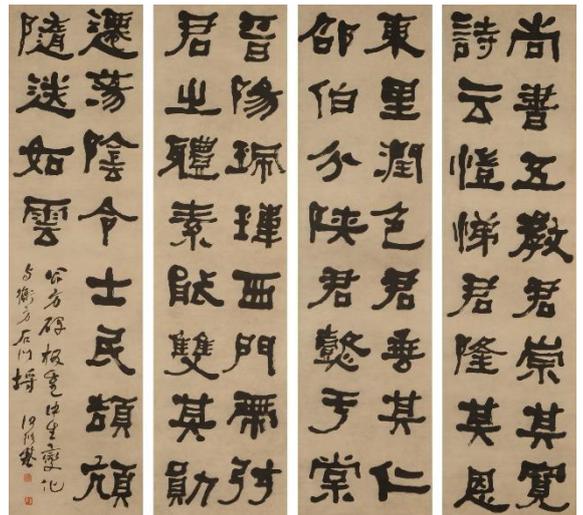
### III. 隸書—漢時代の八分隸—

隸書は、漢時代（前 206～220）に正式書体として用いられていた書体です。後漢時代には、扁平な字形と波打つようなハイである「波磔」を持つ「八分」と呼ばれる姿になります。現在、隸書が日常の筆記に用いられることはありませんが、紙幣や新聞の題字などには使われることがあります。

本章では、後漢時代に建てられた石碑を手本とした臨書作品を展示します。石に刻された隸書は、書家たちの手によってどのように紙に書き写されるのか、その変容をご覧ください。



汪洵 (?~1915?)  
《隸書臨封龍山頌軸》  
清時代末期～中華民国初期頃



何紹基 (1799～1873)  
《隸書臨張遷碑四屏》  
清時代後期

### IV. 篆書—中国古代の金石文—

篆書は、漢字のもっとも古い書体です。象形性が高く、現在では印鑑などに使われています。篆書には様々な種類がありますが、秦時代 (?～前 207) の始皇帝 (前 259～前 210) が中国全土を統一した時に定めた「小篆」が標準的なものとされます。それ以前は点画の数が多い「大篆」が用いられ、さらに古くは地方ごとに独自の字形を使用していました。

これらの文字は青銅器に鋳込まれ、あるいは石に刻されて、現在に伝わっています。金属や石に残されている文字を「金石文」と呼び、篆書は金石文を代表する書体ともいえます。本章では、これら中国古代の金石文を手本とした臨書作品を展示します。

#### 参考展示

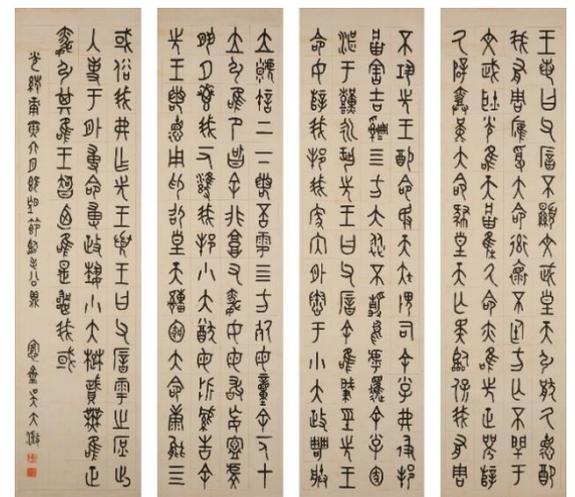
一部の臨書作品については、手本となっている作品の拓本をあわせて展示します。ぜひ見比べながら鑑賞ください。



王羲之 《集王聖教序》  
唐時代 咸亨3年 (672) 刻



吳昌碩 (1844～1927)  
《篆書臨石鼓文四屏》  
中華民国3年 (1914)



吳大澂 (1835～1902)  
《篆書臨毛公鼎四屏》  
清時代後期 光緒16年 (1890)

# 関連イベントのご案内

春季展期間中、下記のイベントを行います（②と④のご参加には当日の入館料が必要です）。  
※関連イベントは、新型コロナウイルスの拡大状況により延期／中止する場合があります。  
最新情報をホームページでご確認下さい。

## ①Web 内覧会

### 春季企画展の見どころガイド！

展覧会開催前日の展示室から、  
YouTube ライブ配信を行います。  
チャットでのご質問も受け付けます。

日 時：4月14日（金）16時00分～17時00分  
担 当：根來 孝明（観峰館 学芸員）

URL：<https://youtube.com/live/GIwbLSQYZ2k>



特別展示室から生中継を行います  
※写真は過去の展示風景です



Web 内覧会はこちら！  
※アーカイブで  
ご覧いただけます

## ②土曜講座

展示担当学芸員が、企画展に  
関連した内容の講座を行います。

### 1 「臨書の魅力」

日 時：4月22日（土）  
13時30分～14時30分  
担 当：根來 孝明（観峰館 学芸員）  
定 員：20名（要予約）

### 2 「臨書作品の見方／考え方」

日 時：6月3日（土）  
13時30分～14時30分  
担 当：根來 孝明（観峰館 学芸員）  
定 員：20名（要予約）



展示担当学芸員による講座の様子です  
※写真は過去のもので

### ③アンティークオルゴール鑑賞会

観峰館が収蔵しているアンティーク  
オルゴールを実際に演奏します。

日 時：4月29日（土・祝）14時30分～15時30分  
担 当：観峰館 学芸員  
定 員：30名（要予約）

☆4月29日（土・祝）は入館無料日です！  
アンティークオルゴール鑑賞会も無料で  
ご参加いただけます。



アンティークオルゴールの音色をお楽しみください  
※写真は過去のものです

### ④ギャラリートーク&ミニコンサート

井上幸紀氏による二胡演奏と、春季企画展  
「みて、うつす。—中国近代の臨書作品—」  
の作品解説を行います。



展示室で作品を見ながら解説いたします  
※写真は過去のものです

日 時：5月14日（日）13時30分～15時00分  
演奏者：井上 幸紀氏（二胡奏者）  
展示解説：根来 孝明（観峰館 学芸員）  
定 員：30名（要予約）  
※所要時間はコンサート・ギャラリートークとも  
40分の予定です。



井上 幸紀氏（二胡奏者）

背景画像：（左）徐三庚《篆書臨祀三公山碑軸》  
（中）愛新覺羅溥忻《行書臨米芾虹峯詩卷軸》  
（右）楊峴《隸書臨西嶽華山廟碑四屏》

## ～「書の文化にふれる博物館」 観峰館について～



観峰館は「書の文化にふれる博物館」として、公益財団法人日本習字教育財団が、書道文化の普及を目的に運営する博物館です。主な収蔵品は、日本習字創立者の原田観峰（1911～1995）が情熱を傾けて収集した2万5千点におよぶ中国近現代書画や碑版法帖のほか、日本の書画や和本類など、書の文化を理解する上で非常に貴重なものです。



本館1階展示室



たんぼくけいせい殿  
「澹泊敬誠殿」復元展示

常設展示では、清朝の康熙皇帝（1654～1722）が揮毫した扁額が掛かる離宮内部を再現した「避暑山荘展示室」ほか、実際に拓本の採拓ができる「復元石碑」、書体の変遷を紹介する「書の歴史」などで中国書法文化を紹介しています。

新館特別展示室では、多彩な企画展を開催します。また中国建築風のギャラリー「書院展示室」や欧米資料を集めた「西洋アンティーク室」など見どころが満載です。

## 観峰館 概要

名称：観峰館

運営母体：公益財団法人 日本習字教育財団

住所：〒529-1421 滋賀県東近江市五個荘竜田町 136

電話番号：0748-48-4141 (FAX：0748-48-5475)

URL：<https://kampokan.com/>



観峰館ホームページ

## アクセス情報

### ①電車・バスをご利用の場合

JR 琵琶湖線「能登川」駅下車  
→近江鉄道バス（八日市駅行き）で  
「金堂竜田口」下車→徒歩約 15 分  
(全所要時間約 25 分)

### ②お車（名神高速）をご利用の場合

- ・名古屋方面 / 彦根 IC から国道 8 号で  
南西（大津方面）へ約 16 キロ
- ・大阪方面 / 竜王 IC から国道 8 号で  
北東（彦根方面）へ約 16 キロ

### ③タクシーをご利用の場合

JR 琵琶湖線「能登川」駅  
東口タクシー乗り場から乗車  
約 10 分 (2,200 円程度)

※運転手さんに「観峰館裏門（国道の反対側の入り口）まで」とお伝えください。



## 本展に関するお問い合わせ

公益財団法人日本習字教育財団 観峰館  
〒529-1421 滋賀県東近江市五個荘竜田町 136  
TEL：0748-48-4141 / FAX：0748-48-5475  
Email：[kampokan@nihon-shuji.or.jp](mailto:kampokan@nihon-shuji.or.jp)

展示担当者：根来 孝明（ねごろ たかあき 観峰館 学芸員）



かん ぼう かん  
観 峯 館

KAMPO MUSEUM IN SHIGA

